滋賀県指定有形文化財徳源院三重塔保存修理工事について

上席研究員　古荘　貴也

１．はじめに

徳源院三重塔は、令和４年度に耐震診断を行い、令和５年４月から令和５年12月で保存修理事業が完了した。当協会ではこの工事の耐震診断及び設計監理を行ったので、その概要について報告を行う。

図１　徳源院位置図

２．徳源院の概要

宗教法人徳源院は、天台宗比叡山延暦寺に直属し、霊通山清滝寺徳源院と称する。清滝寺については昭和８年に滋賀県保勝会から発行された「滋賀県史蹟調査報告第五冊」に「京極氏歴代墳墓」と題して詳しく調査報告がなされているので、その概要を記す。

現在の徳源院境内は山を背にし、東面して寺域を占め、東面の門を入ると向かって右側（北寄）に庫裡があり、それより南へ書院、本堂、位牌堂と続いて、すべて東面して並び、位牌堂の南側を奥に登ると歴代の墓所に至る。三重塔は位牌堂の南東に建ち、墓所の門の東正面に当たって、これも東を正面としている。なお境内の南東隅と北東隅に土蔵がある。

清滝寺は京極第一祖氏信によって創められその菩提寺になったものと伝えられるが、創立年次は明確ではない。しかし氏信の花押がある弘安９年(1286)の料田寄進の文書が寺蔵されており、当時既に寺があったことは明らかである。

３．三重塔の概要

構造形式　三間三重塔婆、こけら葺

三重塔の建立年次は、今までの調査にも塔の建立に直接結びつく記録や資料は発見されていないようで、昭和52年の修理工事中にも建物部材に墨書等見出すことができなかった。前述の古記録を引いて高和及び高豊の代に寺の復興がなされていることがわかる。今後確実な資料が発見されて建立年次などが明確になることが望まれる。地元には丸亀から移築

したとの口伝があるようだが、部材の取付釘等の様子を見るとその説は全く相違したもので、塔はこの位置に新造されたことが明らかであり、建立後一度も解体修理を受けたことはない。ただ軒廻りには後世の取替材が多く、また屋根に桟瓦を葺いた時期も明らかでない。

直近の昭和52年の修理では、屋根葺き替え及び部分修理を行った。後世の桟瓦葺をこけら葺に復し、軒廻りや縁廻りの腐朽材を取り替えた。心柱は当初の長さを保持していたが、腐朽のため継手位置を約1.8m下げ、上部を取り替えた。欠失していた露盤、伏鉢及び水煙を補い、竜車及び宝珠以外はすべて新しくして相輪を整え、避雷針を設置した。

４．工事概要

（１）破損状況

前回の昭和52年(1977)の屋根葺替修理から46年が経過し、屋根こけら葺全体に腐朽、破損が生じていた。特に三層の隅は野隅木、化粧垂木にまで腐朽が進んでおり、早急に修理が必要な状況であった。また、床下亀腹に破損が生じているほか、軒廻り及び高欄に破損が生じていた。

（２）工事内容

耐震診断及び屋根葺替・部分修理。

令和４年度に建造物の耐震診断を実施し、耐震補強が不要という結果が出たが、多雪地域であることから積雪による長期荷重を検討すると、桔木が折損するという結果が出たので桔木断面を大きくすることにした。令和５年度は屋根こけら葺の全面葺替えと、積雪対策として桔木の取替え、下記の部分修理を行った。

初層高欄の解体修理や、３層野隅木、茅負、小屋貫、柱受材、軒廻りの修理。初層連子風板壁、壁板の修理。亀腹の漆喰叩き修理。飾り金具の塗装直し。小屋組内部・床組の防腐防蟻処理。

また３層隅の軒廻りでは、木組の緩みやずれにより丸桁や出組に著しい垂下が生じていることが分かったので、これ以上の垂下を予防するために３層小屋裏に鉄製丸桁桔木を設置した。木製桔木でも検討したが、断面積が大きくなるため今回は鉄製とした。

２層、３層の縁廻りに高欄はついているが、縁板は高欄から外側しか張られていなかった。その縁板は建物に平行に張っているが、側面は木口縁に見えるように欠き込みが施されていた。縁板がないことで雨仕舞の問題は生じていなかったが、小動物の進入の恐れがあるため、仮設的に縁板を張った。

おわりに

本稿作成にあたり、徳源院及び工事関係者の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

図２　修理前　空撮（右：南）

図３　修理前　初層高欄（東面）

図４　３層桔木を全て取替え。
左手前野隅木は腐朽のため取替え。（南面）

図５　３層小屋組に丸桁桔木取付け。
内部は通し肘木に固定。

図６　修理前　２層縁　高欄内側に縁板はないが、
外側には木口のみ縁板がつく。

図７　竣工　２層縁
仮設的に高欄内側に縁板を張る。

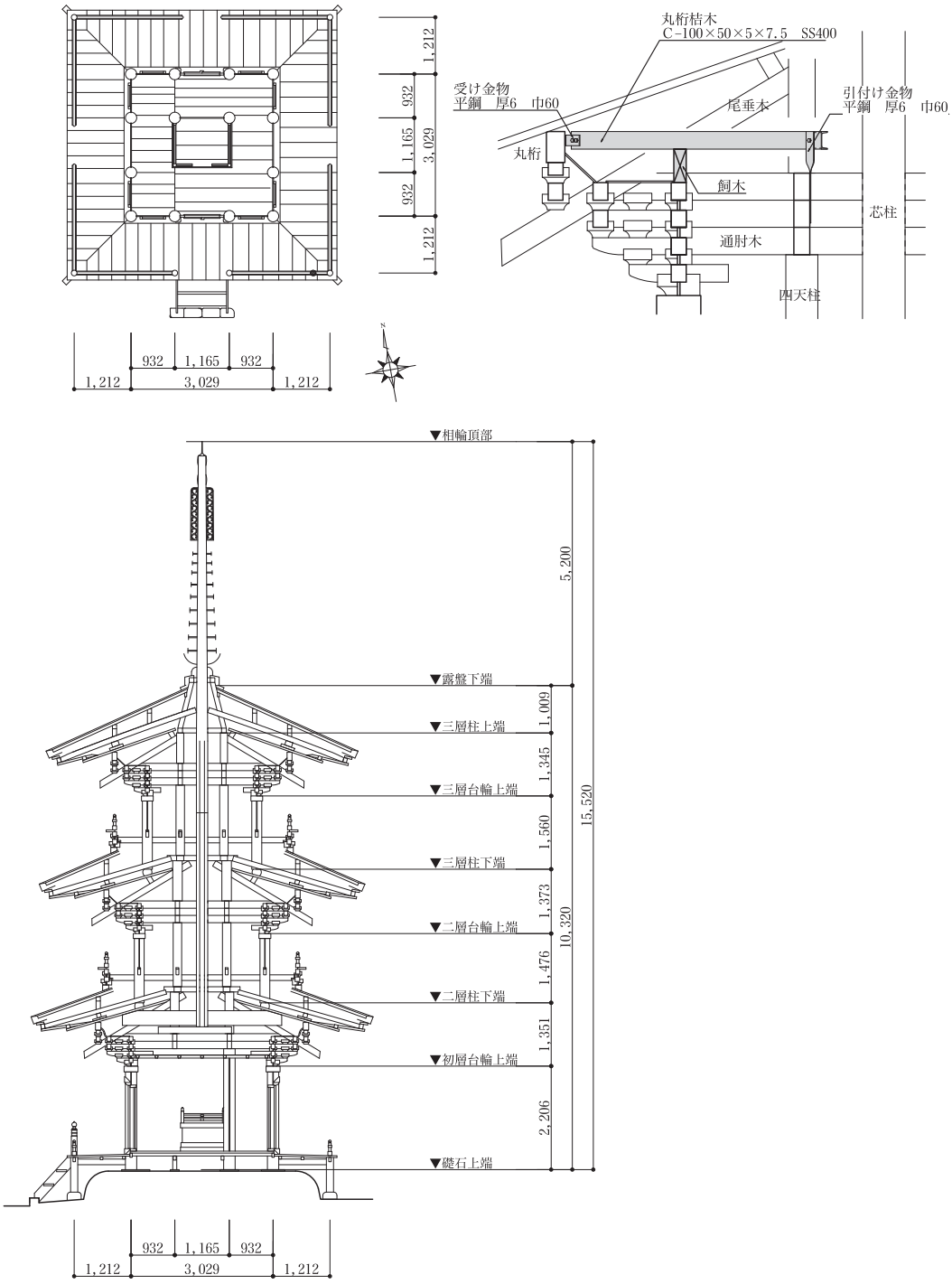

図８　徳源院三重塔　初層平面図、丸桁桔木概要図、断面図